

## 特別支援学校における体育指導に関する調査研究

渡邊 貴裕 順天堂大学スポーツ健康科学部  
 橋本 創一 東京学芸大学教育実践研究支援センター  
 菅野 敦 東京学芸大学教育実践研究支援センター  
 宮崎 義成 東京学芸大学大学院  
 尾高 邦生 東京学芸大学附属特別支援学校

**要 旨**：本研究では、知的障害特別支援学校小学部 204 校、中学部 203 校、高等部 243 校を対象として、体育及び保健体育の授業とそれ以外の体育的活動、球技指導についての実態調査を行った。回答が得られた学校はそれぞれ小学部 123 校(回収率 60.2%)、中学部 125 校(回収率 61.5%)、高等部 134 校(回収率 55.1%)であった。

特別支援学校の体育指導は、各教科における体育(保健体育)はもとより、それ以外の体育的活動等、教育活動全体を通して行われているが、それぞれの取り組みに関連性がみられなかった。球技指導に関しては、生涯スポーツにつなげていくことを視野に入れ指導内容を検討していくとともに、低年齢段階からの一貫して継続的な取り組みや、投動作の指導方法に関する実践的研究を行っていく必要がある。

**Key Words**： 特別支援学校、体育指導、球技指導

### ● I. はじめに

特別支援学校の教育活動において、日常的に体を動かす機会や、仲間と触れ合う機会を持つことは、心身ともに健康な生活を営むために重要である。また、こうした活動は特別支援学校在籍中のみならず、家庭生活や卒業後の生活につなげていくことが望ましい。

知的障害特別支援学校で体育及び保健体育(以下、体育)を展開する際、児童・生徒の中に身体の動きのぎこちなさがみられる子ども、ボディイメージが形成されていない子ども、低緊張及び過緊張な子ども等が多くみられる。そのため、体育の授業では「体づくり」や「動きづくり」を中心とした指導が展開されている。こうした運動をより多く経験させ、様々な動きを身につけさせていくことは、その上の年齢段階において、簡単なスポーツや色々なスポーツ種目につなげていくためにも重要である。

筆者はこれまで特別支援学校の体育の教育課程や個別の指導計画に関する実態調査を行ってきた。この研究を通して得られた知見としては、以下の 2 点があげられる。

一つは、特別支援学校の体育の授業では、児童・生徒の「体づくり」や「動きづくり」といった個々の身体面の発達を促すための指導(個人的運動種目)が重視され、学部を問わず十分な時間をかけ取り組まれている点である。二つ目は、集団的運動種目である球技指導の困難さがみられ、その目標やねらいが達成されない点である<sup>5)</sup>。

特別支援学校では、体育の授業以外に「朝の運動」や「体づくり」、「体力づくり」、「マラソン」といった活動(以下、体育的活動)、さらには特別活動、自立活動等においても体育指導が行われている。そこで、より効率よく指導をすすめていく方策として、先に述べた個人的運動種目と集団的運動種目がこれらの授業全体を通して関連付けられていくことが望ましい。そのためには、それぞれの学習内容ではどのような運動が行われているのかを明らかにしていく必要がある。また、指導に困難さがあるとされてきた球技に関しては現段階ではどのような指導が行われているのかより踏み込んだ調査が必要である。

そこで本研究では、知的障害特別支援学校小学部、中学部、高等部を対象に、体育の授業及

びそれ以外の体育的活動，球技指導に関する実態調査を行い，これらをもとに特別支援学校の体育指導の現状と課題を明らかにすることを目的とした。

## ● Ⅱ. 方法

### 1. 調査対象

東日本地域の知的障害特別支援学校の小学部 204 校，中学部 203 校，高等部 243 校を対象とした。

### 2. 調査手続き

2011 年 2 月，知的障害特別支援学校の小学部 204 校，中学部 203 校，高等部 243 校に調査票を郵送し回答を求めた。調査票の記入は体育担当教諭に依頼した。返送のあった小学部 123 校(回収率 60.2%)，中学部 125 校(回収率 61.5%)，高等部 134 校(回収率 55.1%)を本研究の分析対象校とした。

### 3. 調査内容

アンケート調査は「体育の授業及びそれ以外の体育的活動に関して」と「球技指導に関して」の 2 つの観点から行った。体育の授業及びそれ以外の体育的活動に関しての調査内容は，①年間の指導内容，②個人的運動種目と集団的運動種目の割合，③個人的運動種目と集団的運動種目の基本的な考え方，④「朝の運動」等の体育的活動の実施の有無とその内容，⑤教育課程上の届け出上の分類，⑥準備運動や朝の体操などの学校独自の取り組みの有無とその内容，⑦部活動の実施の有無とその内容である。球技指導に関しての調査内容は，①年間の指導内容，②球技指導の工夫点，③投動作を指導する際の困難さの有無，④投動作の指導の有無とその内容である。

## ● Ⅲ. 結果

### 1. 体育の授業及びそれ以外の体育的活動に関して

#### (1)年間の指導内容

「この一年間に指導した，または指導しよう」と計画している題材や単元は」の設問に対する回答(複数回答)は Fig.1 の通りである。各学部を通して特に高い結果が得られたのは，「①体

づくり運動における，体ほぐしの運動」，「⑤水泳」であった。また，学部年齢段階があがるにつれて多くなる指導内容は，「②体づくり運動における，体力を高める運動」，「④陸上運動」，「⑥球技」，「⑬学校や地域のスポーツ大会で行われている種目」であった。逆に，学部年齢段階があがるにつれて少なくなる指導内容は，「③器械運動」，「⑧ダンス」があげられた。「⑨体育に関する知識」及び「⑩保健」は中学部の回答が少なく，それぞれ「⑨体育に関する知識」が 9 件(7.3%)，「⑩保健」が 44 件(35.7%)であった。「⑫パラリンピックやスペシャルオリンピックスで行われている種目」は中学部で 9 件(7.3%)，高等部で 18 件(13.4%)と，小学部の 56 件(45.5%)よりも少なかった。

#### (2)個人的運動種目と集団的運動種目の割合

体育の授業の中での，個人的運動種目(マラソン，体づくり運動等)と，集団的運動種目(球技やゲーム等)の時間配分の割合についての回答を，それぞれの学部ともに一回の授業と年間の授業とに分けて示した(Table 1)。学部年齢段階があがるにつれて，一回の授業，年間の授業ともに集団的運動種目の割合が増えていた。

#### (3)個人的運動種目と集団的運動種目の

##### 基本的な考え方

「個人的運動種目と集団的運動種目を取り扱うにあたっての，基本的な考え方や留意点」の設問に対する回答(複数回答)は Fig.2 の通りである。設問①，設問⑤の回答にもあるように，個人的運動種目と集団的運動種目を取り扱う際，体育や自立活動，朝の運動等の体育的活動といった指導場面ごとに分けて考えている学校は少なかった。また，個人的運動種目では，どの学部年齢段階でも，「順番やきまりを守って運動すること」，「個々の体力や運動能力に応じて個別指導すること」を重視していた。設問⑥「個人的運動種目に取り組む前に，その種目に関連する体の動き(例えば，水泳であれば，腕の動かし方等)を必ず指導している」や，設問⑦「集団的運動種目に取り組む前に，その種目に関連する体の動き(例えば，バドミントンであれば，素振り等)を必ず指導している」への回答は学部年齢段階が上がるにつれて増え，体の動かし方等の技術指導は低年齢段階ではあまり

Table 1 人的運動種目と集団的運動種目の割合

	一回の授業あたり (個人):(集団)	年間の授業あたり (個人):(集団)
小学部	6.3 : 3.8	6.4 : 3.5
中学部	5.3 : 4.6	5.3 : 4.6
高等部	4.1 : 5.8	4.5 : 5.4

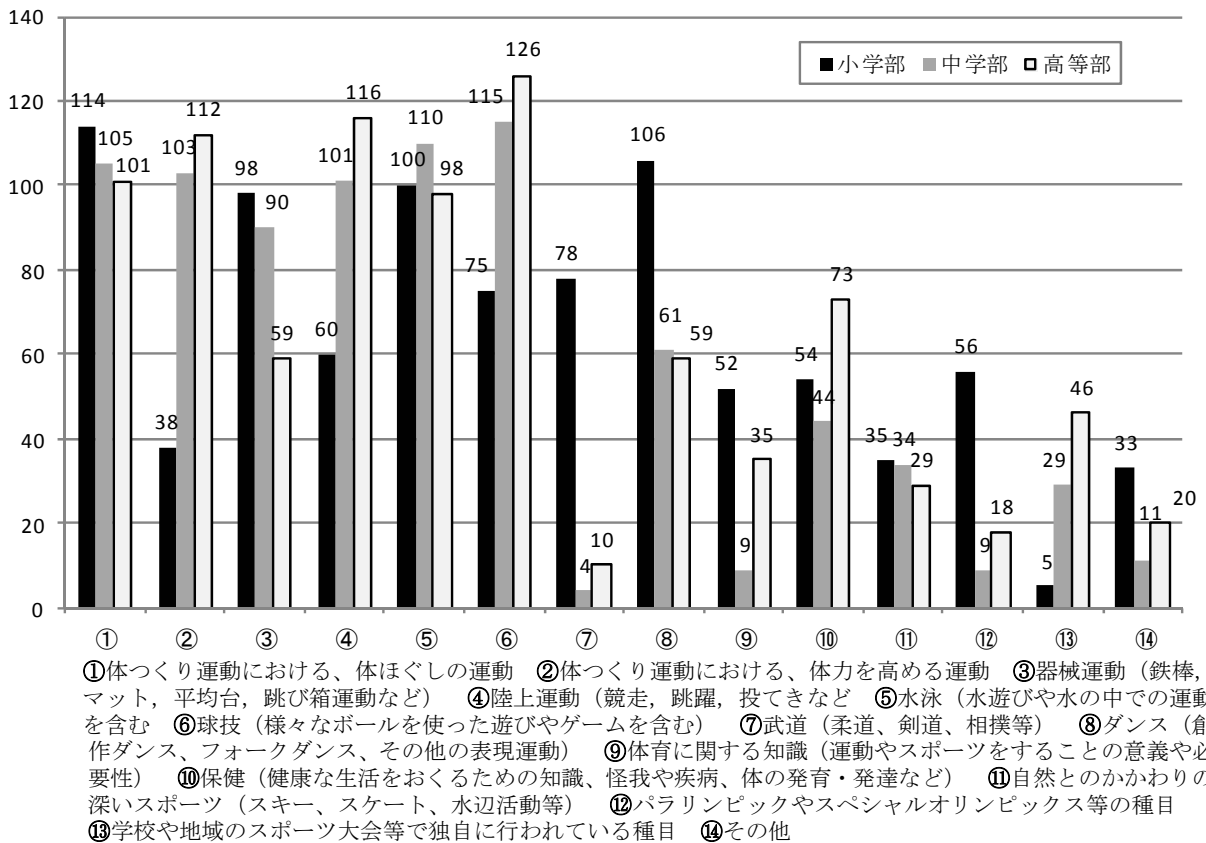


Fig. 1 年間の指導内容 (複数回答)

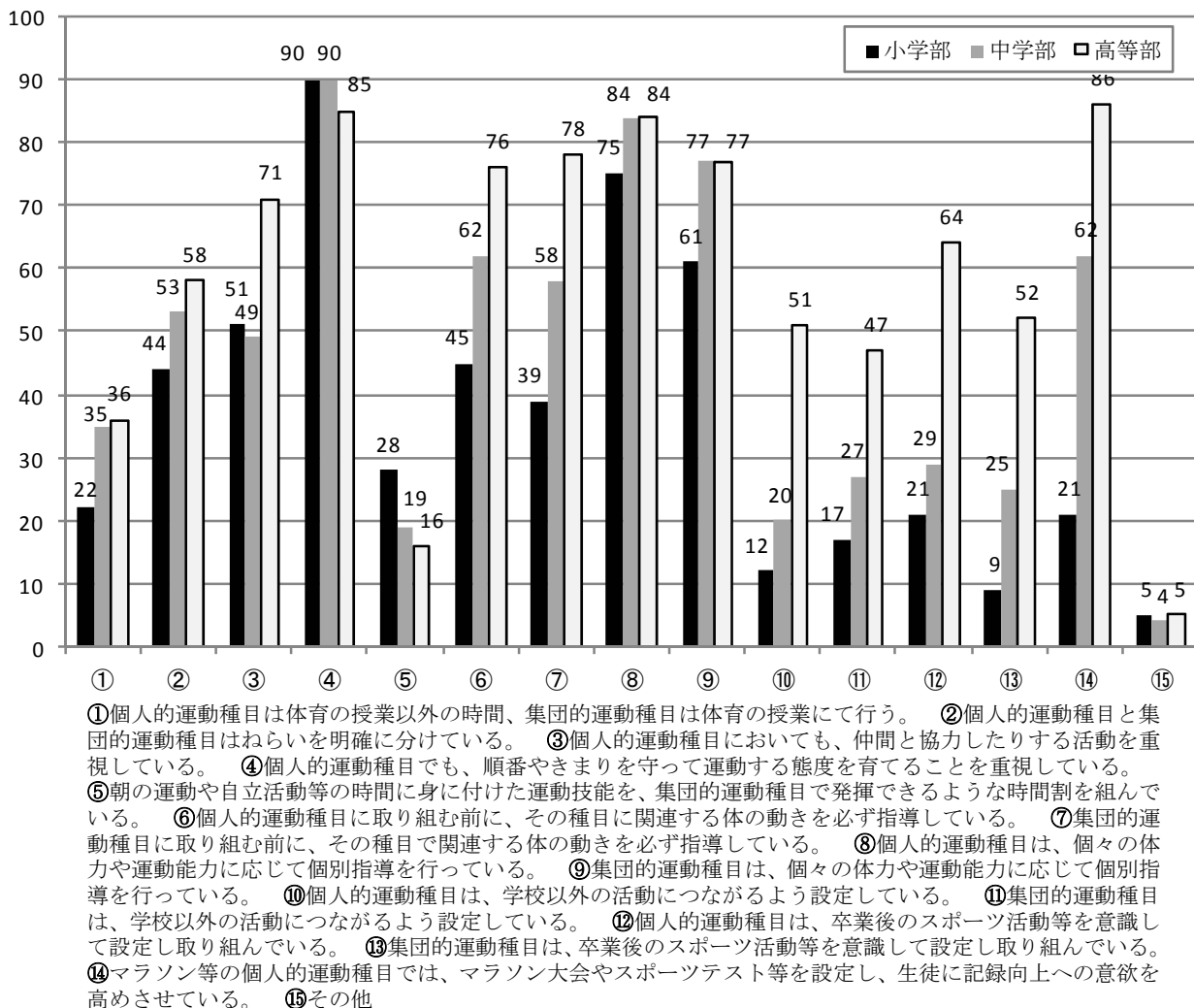


Fig. 2 個人的・集団的運動種目設定にあたっての基本的考え方 (複数回答)

行われていなかった。設問⑩, ⑪, ⑫, ⑬の回答にもあるように, 高等部段階では, 個人的運動種目及び集团的運動種目ともに, 卒業後のスポーツ活動や学校以外の活動への意識が高くなっていたが, 約 4 割程度の回答だった。さらに, 小学部及び中学部では, 同様の設問に対する回答は約 2 割未満と少なかった。

#### (4)「朝の運動」等の体育的活動の実施の

##### 有無とその内容

「体育の授業以外に, 朝の運動または体・体力づくり等の時間は設定されていますか」の設問について, 小学部 89 校(72.3%), 中学部 98 校(78.4%), 高等部 106 校(79.1%)が「設定している」と回答し, 各学部年齢段階において 7 割以上の学校が「朝の運動」や「マラソン」, 「体づくり」といった活動(以下, 体育的活動)を設定していた。この体育的活動の 1 回あたりの運動時間の平均を算出したところ, 小学部が 19.4 分, 中学部が 21.6 分, 高等部が 25.6 分であった。また, 週当たりの実施回数の平均を算出したところ, 小学部が 3.1 回, 中学部が 3.6 回, 高等部が 3.4 回であった。さらに, 体育的活動における運動種目内容は, 多くの学校が時間走, 周回走などの持久走を行っていた(Fig.3)。

#### (5)体育的活動の教育課程の届け出上の分類

体育的活動の教育課程の届け出上の分類は Fig.4 の通りである。

#### (6)準備運動や朝の体操などの学校独自の

##### 取り組みの有無とその内容

「準備運動や朝の体操などにおいて, 学校独自, または学部独自のものがあり, 取り組んでいますか」の設問について, 小学部 62 校(50.4%), 中学部 50 校(40.0%), 高等部 41 校(30.5%)が「独自の体操や運動があり取り組んでいる」と回答した。また, それらの運動内容を Fig.5 に示す。さらに, それらの運動は, 家庭で実施できるような配慮をしているかについて質問したところ, 各学部年齢段階ともに「学校のみで取り組んでいる」と回答し, 運動の方法を映像や写真, 絵等で家庭に配布している学校はほとんど見られなかった(Fig.6)。

#### (7)部活動の実施の有無とその内容

中学部及び高等部に対して, 部活動の実施状況について調査を行った。中学部では 23 校(18.4%), 高等部では 84 校(62.6%)が部活動を実施していた。部活動の一回当たりの指導時間は, 中学部が平均 60 分, 高等部が 71 分, 週当たりの活動頻度は, 中学部が平均 1.7 回, 高等

部が 2.3 回であった。また, 参加人数は, 中学部が平均 17.4 人, 高等部が 36.7 人, 指導者の人数は, 中学部が平均 6.4 人, 高等部が 10.5 人であった。

指導内容は, 中学部, 高等部ともに, サッカー, バスケットボール, ソフトボール, キックベースボールといった集团的運動種目が多く, 個人的運動種目では陸上競技があげられた。

## 2. 球技指導について

### (1)年間の指導内容

「球技(様々なボールを使った遊びやゲームを含む)の指導について, どんな球技種目に取組んでいますか(取り組む予定ですか)」の設問に対する回答(複数回答)は Fig.7 の通りである。学部年齢段階があがるにつれて, 球技種目への取り組みにも広がりが見られた。その他の項目では, ボールを使った遊びや学部独自のルールによるボールゲーム等が行われており, こうした活動は特に小学部段階で多くみられた。パラリンピックやスペシャルオリンピックスで行われている種目への取り組みは, 各学部年齢段階ともにほとんど行われていなかった。また, 学校や地域のスポーツ大会で行われている種目への取り組みも, 小学部ではほとんど行われておらず, 中学部, 高等部でも 30 校以下であった。

### (2)球技指導の工夫点

「球技やボールゲーム等の指導を行う際, 工夫している点は何か」の設問に対する回答(3つ選択)は Fig.8 の通りである。学部年齢段階があがるにつれて, ルールやコート, チーム編成等を変えながら, 児童・生徒一人ひとりが球技に参加できるような配慮が行われているようであった。

### (3)投動作を指導する際の困難さの有無

「投動作を身につけさせる指導に難しさを感じますか」の設問について, 小学部 116 校(94.3%), 中学部 115 校(92.0%), 高等部 114 校(85.0%)が, 「感じている」と回答した(Fig.9)。

### (4)投動作の指導の有無とその内容

「投動作を身につけさせるために, 身体の使い方等の具体的な指導を行っていますか」の設問について, 小学部 66 校(53.6%), 中学部 73 校(58.4%), 高等部 90 校(67.1%)が, 「指導を行っている」と回答した(Fig.10)。

また, それらの指導のポイントについての回答(3つ選択)は, Fig.11 の通りである。

(5) 投動作を身につけさせるための指導  
(ボールを投げる以外)

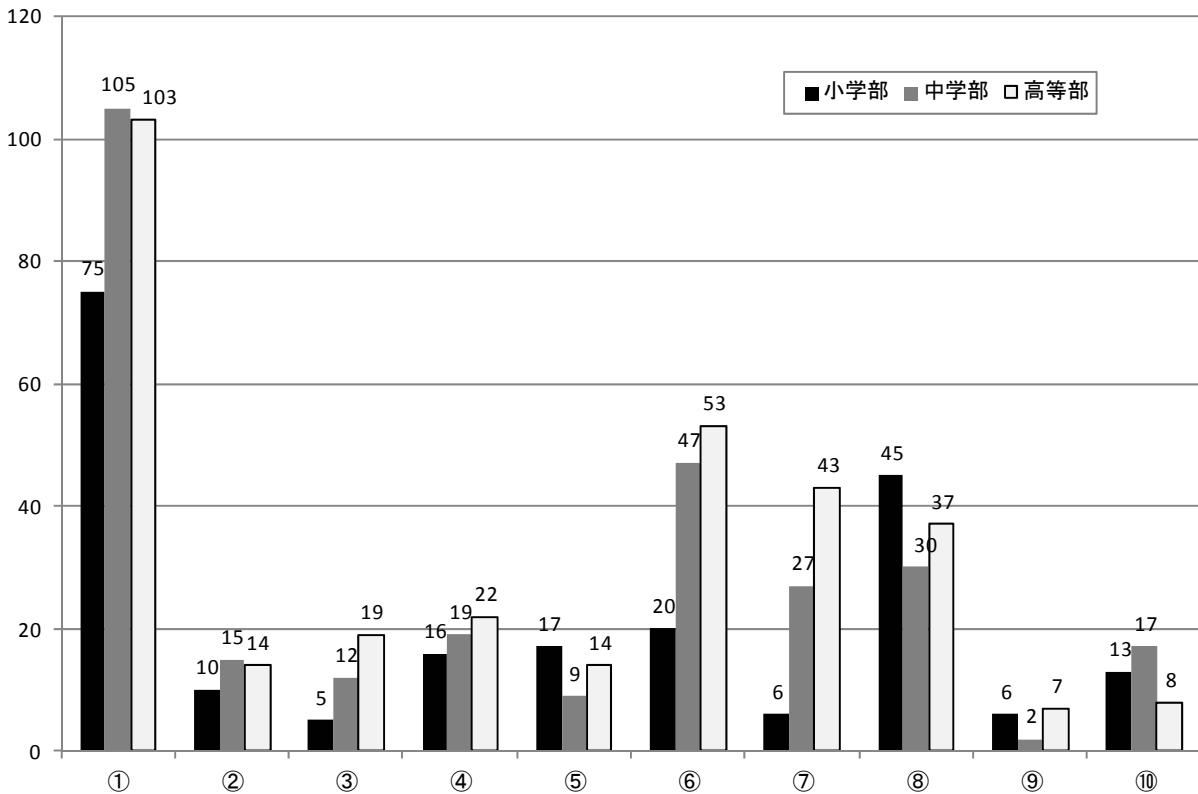
「投動作を身につけさせる指導を行う際、実際にボールを投げる以外に取り入れている指導方法等がありますか」の設問に対する回答(自由記述)を、以下学部ごとに示す。

① 小学部

○ペットボトルの上下を切りとったものをロープに通し、ロープの始点から終点まで投げ、上投げの前段階として取り組んでいる。

(他、同4件)

○お手玉、輪投げ、小さなビニールボール等、子どもが扱いやすく投げやすいものを遊び



①時間走、周回走などの持久走 ②短距離走 ③色々な種類の走りを組み合わせた運動 ④いくつかの運動課題によるサーキット運動 ⑤いくつかの運動課題を模倣する動きづくり ⑥ストレッチ等の柔軟性を高める運動 ⑦筋力トレーニング ⑧音楽に合わせて体を動かすリズム運動 ⑨固定遊具や自転車、なわとびなどを使った運動 ⑩その他

Fig. 3 体育的活動の指導内容(複数回答)

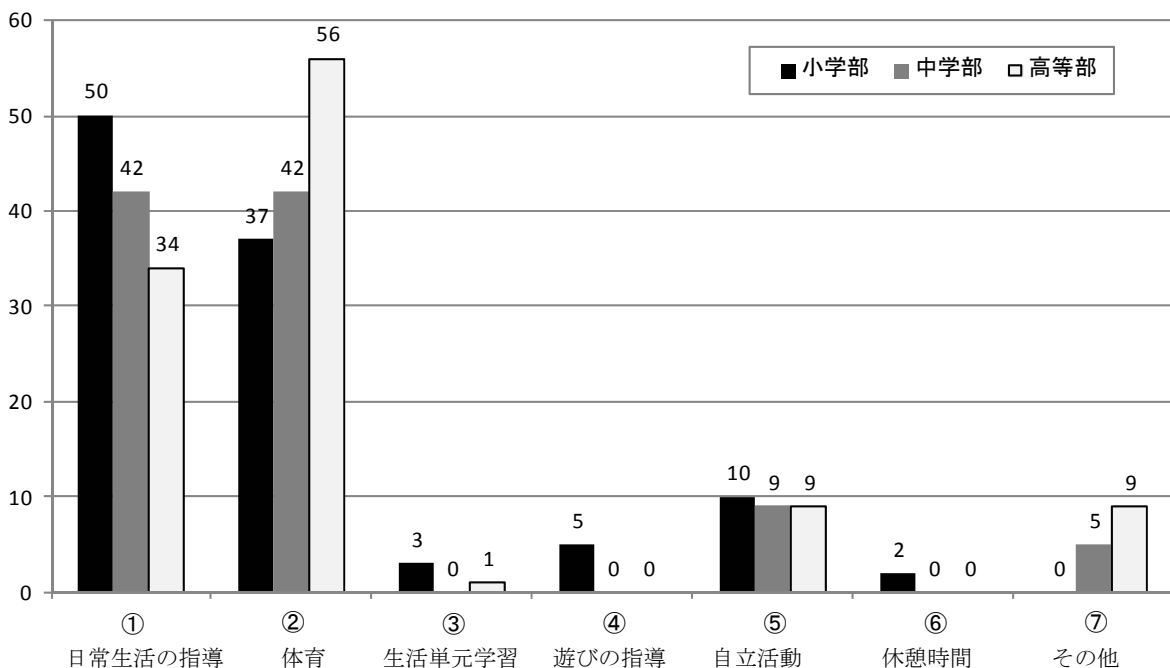


Fig. 4 体育的活動の教育課程届出上の分類

- の中でできるようにする。(他, 同 4 件)
- 擬音語を用い、投げるタイミングや動作を子どもに伝える。また投げる動作のお手本を子どもに見せる。
  - 高い位置にあるボールを叩く。
  - 基本的な身体の使い方を分析し言葉で教える。

- 足型を置いて、足の位置や、踏み出す方の足を確認する。
- 両腕をぐるぐる回す。
- 足をあげて、おろす、利き腕と反対の足をおろす動きを徹底する。
- ひもをつるし、バトンを下から上に投げる。

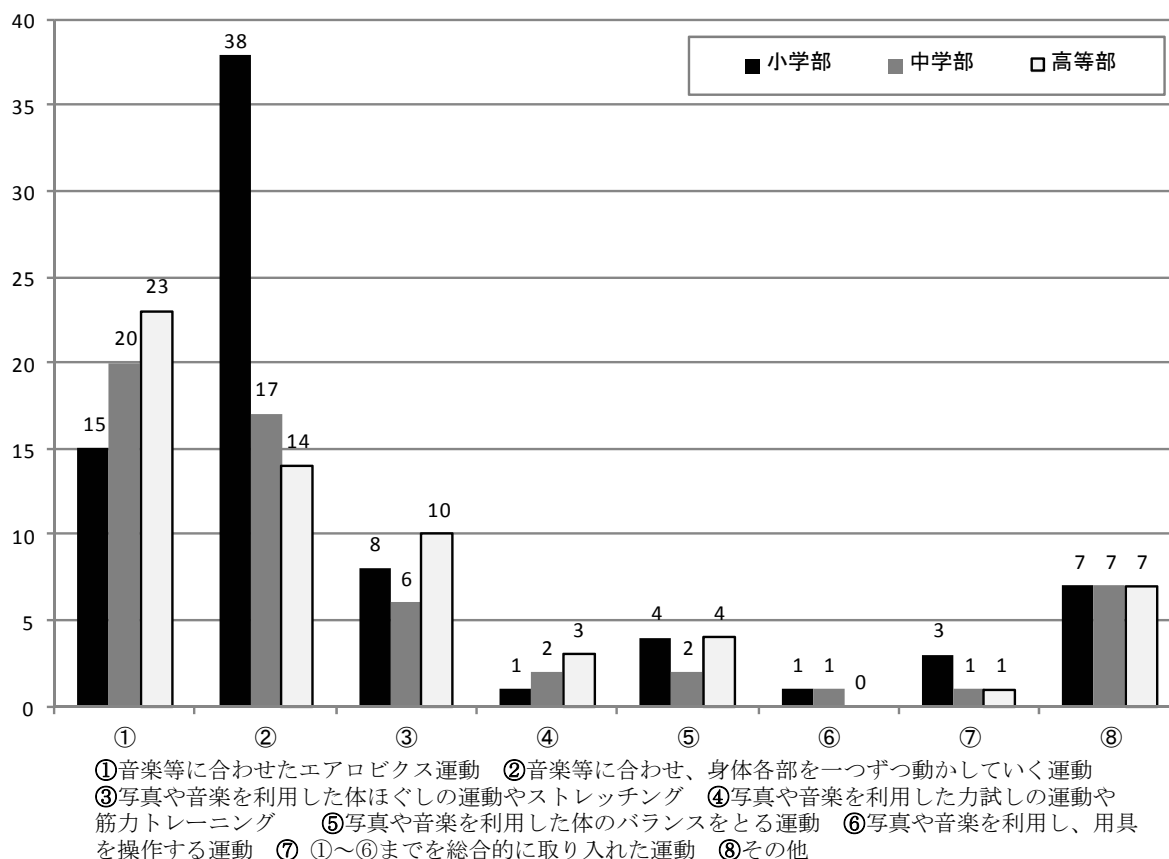


Fig. 5 準備運動及び体操における指導内容（複数回答）

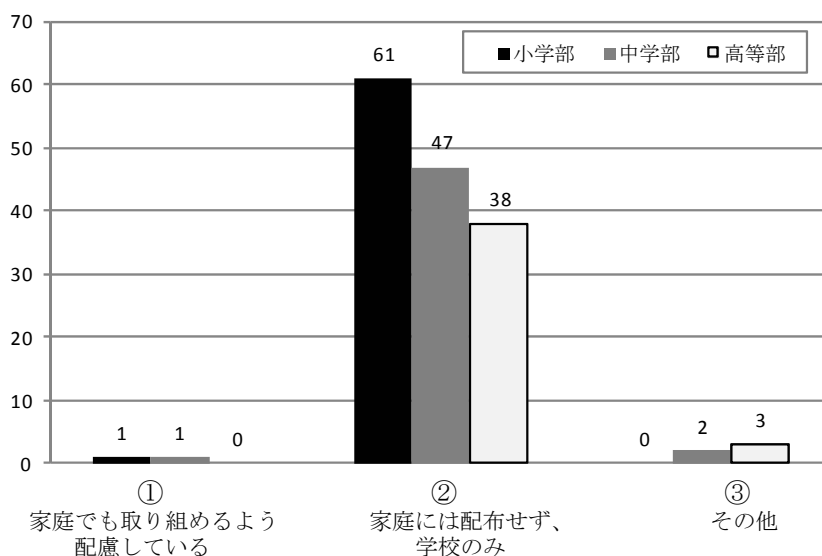


Fig. 6 準備運動及び体操における家庭での実施配慮

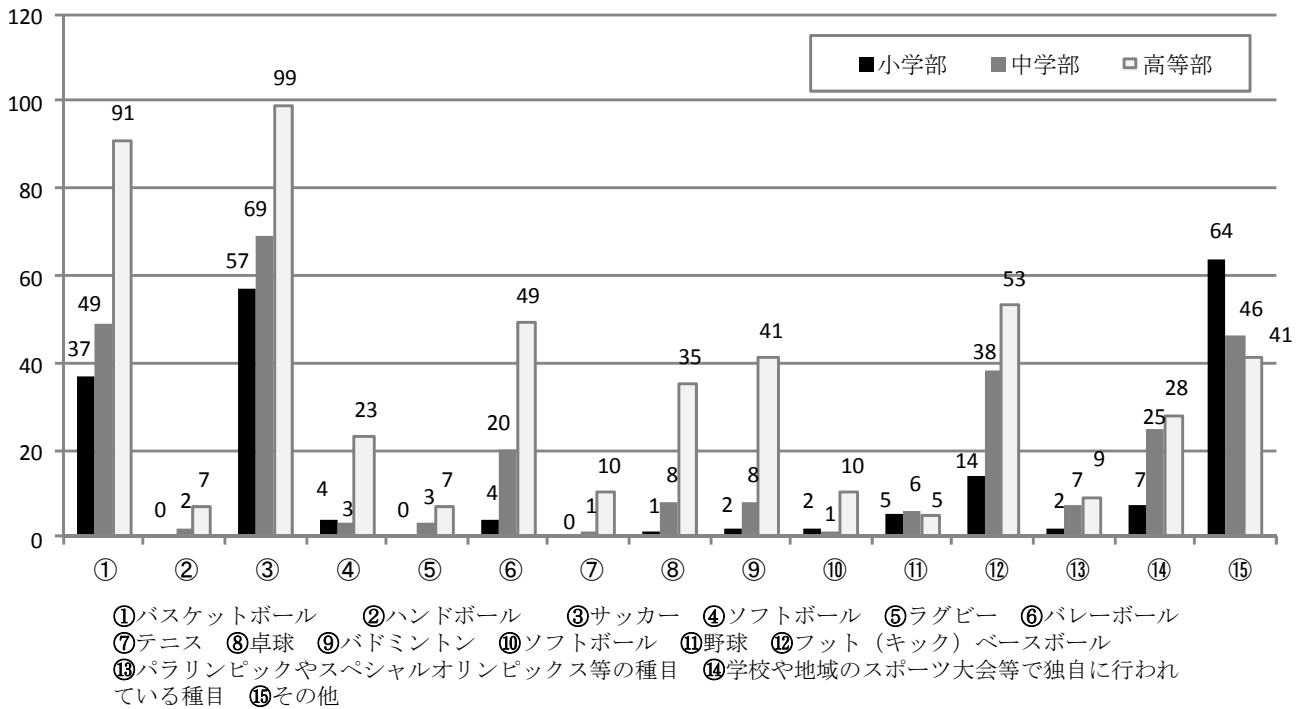


Fig. 7 球技の指導内容（複数回答）

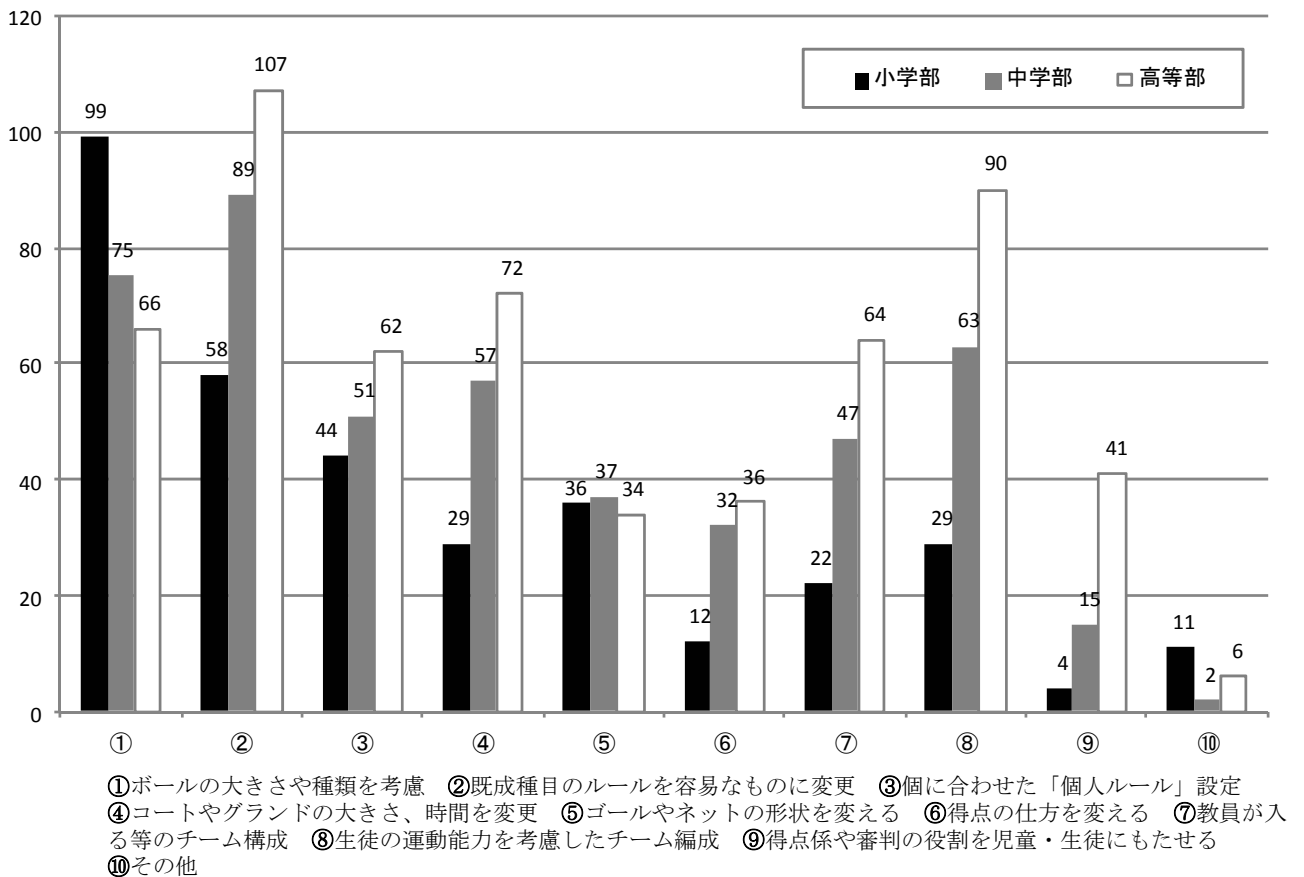


Fig. 8 球技指導の工夫点（3択）

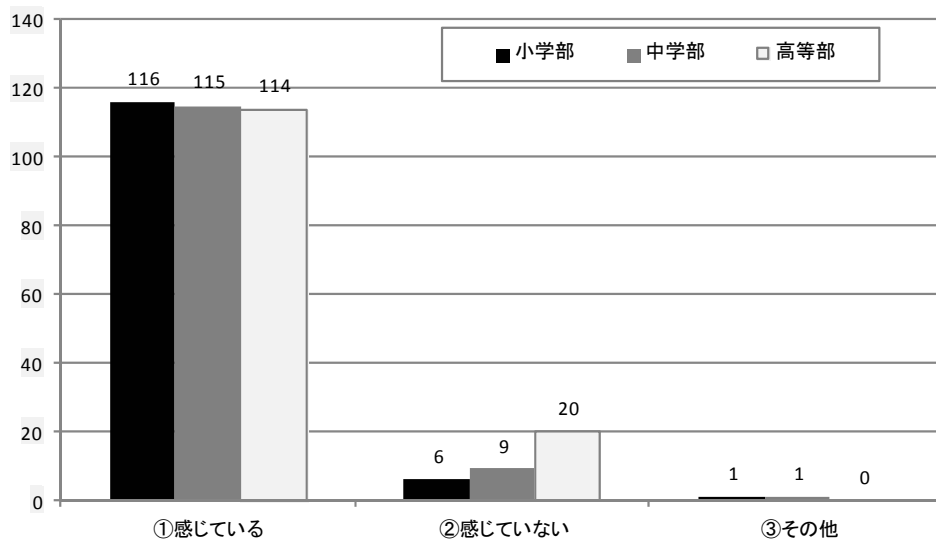


Fig. 9 投動作指導の困難さの有無

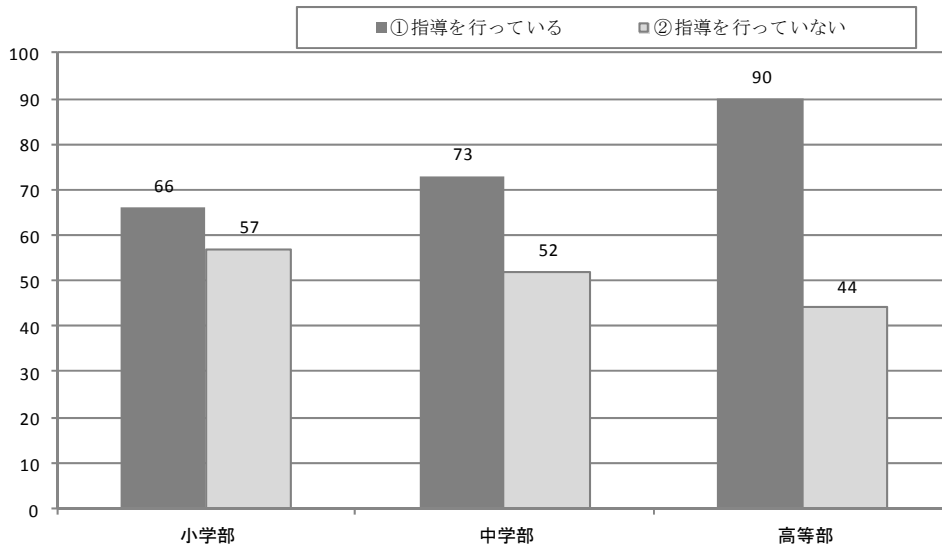


Fig. 10 投動作の指導の有無

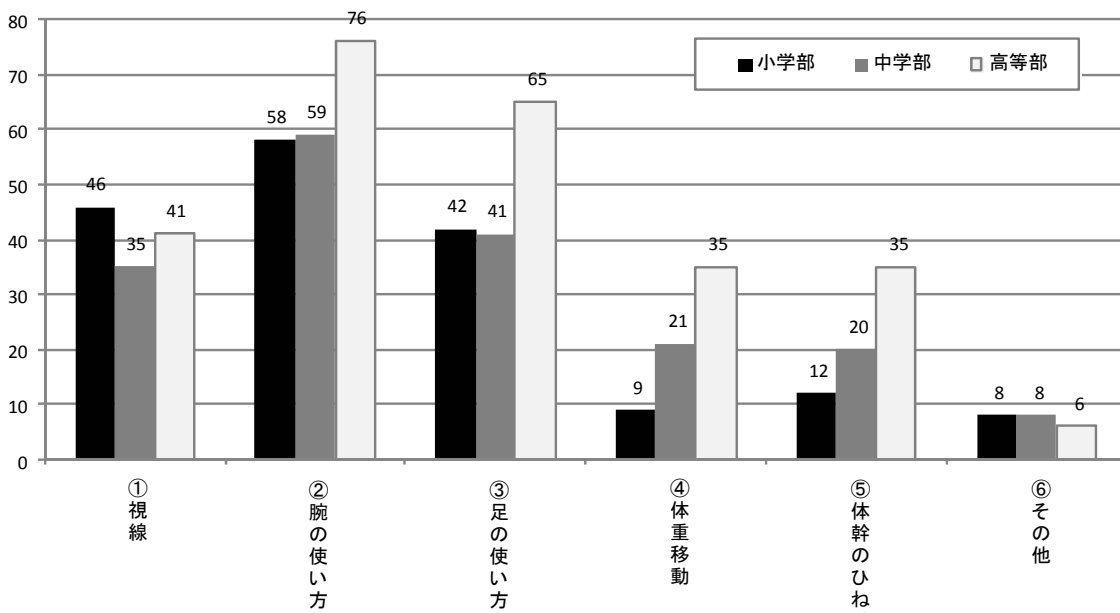


Fig. 11 投動作の指導のポイント (3択)



- バトンにリボンをつけ、曲に合わせて上下左右に振る・回す等も組み合わせ、体操として行う。
- 紙鉄砲を作り、それを鳴らす遊びで、投げるフォーム作りをする。
- 円型マットを敷き、そのマットから出ないようにボールを受け渡し、「ボールを手放す」感覚が身につくようにしている。
- タオル体操で腕を大きく動かす運動をする。

## ② 中学部

- バトン等の筒状の物をロープに通し、ロープの始点から終点までバトンを投げる。  
(他、同 2 件)
- 足型を使い、足を踏み出す方向や位置を確認する。
- 片方を結んだタオルを投げる。
- めんこ遊びを行う。
- 体の向きや腕の動きを言葉で教える。
- 教師が手本を見せたり、実際に生徒の腕を教師が支えたりしながら投げるフォームを繰り返し練習させる。
- 玉入れのカゴに、玉入れ用の玉を投げ入れる動作を、サーキット・トレーニングの中に入れ、徐々に立ち位置を玉入れのカゴから遠くに設定する。
- コーディネーション運動や、めんこ遊び、紙鉄砲、ブーメラン、新聞ボール等の遊びを通して、投げるフォーム作りを行う。
- タオルを使ってのシャドーピッチングなど、体づくり運動の中で足の使い方、体重移動などを感じ、動かせるような動きづくりを行う。
- ボールを相手に渡す動作やかごに入れる動作を練習する。だんだんと距離を離していくことによってボールを遠くへ放つようにしていく。
- 「ジャベリックスロー」を取り入れ、生徒に投げるフォームへの興味を持たせる。
- 紅白玉入れを行う。
- 天井から吊るしたボールをつかんで投げる、もしくは手で打つ。
- タオルを使ってのフォーム作り、ゴムチューブでのトレーニングを行う。
- ボールを握りしめて放せない時は、小さなボールを準備し指先で持てるように渡し、肘と手首を支え、腕の振りを手伝い、指から放れる感触をつかめるようにする。
- 目標物まで投げたくなるような教具を作成し、ボールを投げることへの意欲を持たせる。

- 筒状に丸めた新聞紙を目標物(籠)に向かって投げる。また遠くに投げる。
- タオルを前後左右に振り、腕の可動域を広げる。
- フリスビーを投げる等して、手元から離すタイミングを感じ取れるようにしている。
- 正確な腕と足の動作について、鏡を見ながら教えていく。
- ロープに筒を通して、それを何回も投げ、フォーム作りをする。
- お手玉や輪投げを使って投げる動きを練習する。
- 投球のフォーム(鶴のポーズ)をとらせる。
- 腕回しや、教師が持っているボールにタッチすることで、投げる動き作りをしている。

## ③ 高等部

- タオルの端を持って振らせ、投げる動き作りを行う。(他、同 6 件)
- 「ジャベリックスロー」等で、投動作の経験を拡大させる。(他、同 2 件)
- バドミントンのラケットを遠くに放り投げることで投げる動き作りを行う。
- 紙鉄砲を鳴らし、強く投げることへの意識づけを行う。
- ダーツを投げる。
- 腕の可動域が広がるよう、ストレッチを行う。
- めんこ遊びで投げる動きづくりを行う。
- 空手の「つき」できき手と逆の手をひく動作を教える。
- タオルやスカーフを振り、投げる動きづくりを行う。
- バドミントンのラケットで素振りをするこゝとで、投げる動き作りを行う。
- 生徒の手や足に教師が手を添えて、フォームの確認をする。
- タオルを振って障害物をたたき落とす。
- 何も持たずにフォーム作りを行う。
- タオルの端を縛り、それを使ってキャッチボールをする。
- 体幹を強めるトレーニングを継続的に実施する。
- 乾いたタオルを振り下ろすことで投げるフォームを作る
- 足型をつくり、そこを目安に足を踏み出すこゝとで体のひねりと体重移動を体感させ、投げるフォームを作る。
- ブーメランで遊ぶこゝとで、投げるこゝとへの興味を高める。
- 棒とつながったボールの教材を作り、棒の方

を持って投げることで、肘を高くしてボールを投げることを指導している。

○フリスビーを投げ、体幹のひねりの感覚を身につけさせる。

#### ● IV. 考察

本研究では、知的障害特別支援学校を対象に、体育及び体育的活動、球技指導に関する調査を行い、その実態を明らかにしてきた。

体育の指導内容では、先行研究同様、各学部ともに体づくり運動等の基本的な運動、個人的運動種目が重視され取り組まれていた。また、「朝の運動」等の体育的活動でも持久走をはじめとする個人的運動種目が行われており、これらをあわせるとかなりの時間が個人的運動種目の指導に費やされている。それぞれの活動の個人的運動種目と集団的運動種目の取り扱いについて、特別支援学校学習指導要領解説によれば、「体育・健康に関する指導は教科としての保健体育において、基礎的な身体能力の育成を図るとともに、特別活動や部活動、教育課程外の活動等を相互に関連させながら、学校教育活動全体として効果的に取り組む」<sup>2)</sup>としている。

ところが今回の調査では、例えば、「個人的運動種目は体育の授業以外の時間(朝の運動、自立活動等)で主に行い、集団的運動種目は体育の授業にて行う」、「個人的運動種目と集団的運動種目はそれぞれねらいを明確に分けている(個人的運動種目は健康の保持増進、体力の向上、集団的運動種目は仲間づくり、生きがいくくり)」等、それぞれのねらいと活動内容を分けて考えることや、「朝の運動や自立活動等の時間に身に付けた運動技能を、集団的運動種目で発揮できるような時間割を組んでいる」等、互いの活動を関連付けたりして指導計画を立案している学校は少なかった。よって、今後はより効果的な指導をすすめていく意味でも、互いの内容に関連性をもたせながら指導計画や単元計画を組んでいくことが課題であると思われた。

本調査では、「体育に関する知識(運動やスポーツをすることの意義や必要性、運動やスポーツの種類ややり方とその効果などの知識)」や「保健(健康な生活をおくるための知識、怪我や疾病、体の発育・発達など)」の回答数が少なく、特に中学部では、「体育に関する知識」が9件(7.3%)、「保健」が44件(35.7%)で、小学部よりも低い回答数であった。渡邊(2010)<sup>4)</sup>は、「生

涯を通して運動やスポーツに親しんでいくためには、自分の身体に関する認識を深め、自分のめあてに合った運動プログラムを選択する、適切なトレーニング方法を習得する、家庭でも継続して取り組むといった流れを定着させていくことが重要である」としており、その意味でも体育の授業において児童生徒に対して体育に関する知識を十分身につけさせていくことが重要である。また、太田(2010)<sup>3)</sup>は、「中学部から高等部にかけての生徒の身体の発達や身体諸機能の働きなどの身体的成熟、心理的な発達に合わせて、保健の指導を適切に行っていくことが大切である」とし、「近年、知的障害の状態が軽度の生徒が増えてきている現状を踏まえると、特に性に関する指導等が重要になってくる」と指摘している。よって、体育理論と同様に保健に関する指導も十分に行っていきたい。こうした体育理論や保健に関する指導は、「児童・生徒の発達の段階を考慮して、学校の教育活動全体を通じて適切に行うもの」<sup>2)</sup>とされており、今後は他の教科や領域において、これらの指導がどのように行われているのかについても調査していく必要がある。

次に球技指導の実際についてみていく。本研究では球技の年間の指導内容はもとより、指導の工夫点等、具体的な指導内容に踏み込んだ調査を行った。球技の指導内容については、先行研究と同様に学部年齢段階があがるにつれて、種目内容に広がりが見られた。その一方、パラリンピックやスペシャルオリンピックで行われている種目への取り組みは、各学部年齢段階ともにほとんど行われていなかった。さらに、学校や地域のスポーツ大会で行われている種目への取り組みも、小学部ではあまり行われておらず、中学部、高等部でも30校以下であった。平成21年3月に改定された特別支援学校学習指導要領では、高等部保健体育の球技の例示で「ユニバーサルホッケー」が加わった。また、将来の余暇活動に結び付く種目として「ボッチャ」や「フライングディスク」が記載された<sup>2)</sup>。その意味では、今後特に中学部、高等部段階の球技指導を行っていく際、卒業後の余暇利用や生涯スポーツへのつながりを意識し、こうした種目を積極的に取り入れていくべきであろう。「その他」の項目では、ボールを使った遊びや学部独自のルールによるボールゲーム等が行われており、特に小学部段階で多くみられた。この点については、学習指導要領においても、「器械・器具などを使った遊びや運動

を行う場合は、ゲーム的な内容を十分取り入れて、体を動かすことの楽しさや体を動かす快い体験を得られるようにすることが大切である」<sup>2)</sup>としている。

球技指導の工夫点についても、学部年齢段階があがるにつれて、ルールやコート、チーム編成等を変えながら、児童・生徒一人ひとりが球技に参加できるような配慮が行われていた。特別支援学校学習指導要領解説では、中学部の「簡単なスポーツ」、高等部の「いろいろなスポーツ」の指導における、ルールの工夫の例示として「バスケットボールのゴールの大きさや高さを変える」<sup>2)</sup>といった表記が新たに加えられており、知的障害の状態の程度にかかわらず、実態に応じた工夫をして取り組むことが求められている。

投動作を指導する際の困難さの有無について調査したところ、ほとんどの学校で、「(困難さを)感じている」と回答していた。また、投動作を身につけさせるための具体的な指導の実施の有無については、小学部及び中学部では、約半数、高等部においては約 7 割の学校で(投動作の)具体的な指導が行われていた。特に、結果(1)及び(2)では、学部年齢段階があがるにつれ、集団的運動種目を行う割合が高くなる点が明らかとなったが、具体的な球技種目を行うようになることで、投動作の指導の必要性が改めて明確になり、そのため高い年齢段階においてもこれらの指導が取り組まれていることが予想される。しかしながら本来であれば、小学部段階こそ、「投げる・捕る」といった基本的運動技能の獲得を目指した指導を重点的に行っていく必要がある。渡邊(2007)<sup>5)</sup>は、小学部 200 校を対象に球技指導に関する調査研究を行ったが、投動作の指導の有無について、「全く行っていない」、「あまりおこなっていない」という回答が全体の約 4 分の 1 を占めていた。本調査でも先行研究と同様に、低年齢段階における投動作の指導の在り方に課題がみられた。

橋本(2009)<sup>1)</sup>は、知的障害児に対して、遊びを通し成熟した投動作と似た動きを無意識に経験できるような援助を行い、短時間でその指導効果をあげている。また、渡邊(2008)<sup>2)</sup>、(2010)<sup>7)</sup>も、特別支援学校小学部児童に対して、ボール投げに類似する活動を実施し、児童の投動作のフォームの改善がみられた。特に小学部段階では言語教示の理解が難しい場合があることから、このような遊びの要素を取り入れた動きづくりの指導を行っていくことが有効な

手段であると考えられる。本調査では、投動作を身につけさせる指導を行う際、実際にボールを投げる以外に取り入れている指導方法について、自由記述による回答を求めたが、ペットボトルやタオルを使い、投げる動作の指導を試みている学校が多くみられた。今後はこうした方法による指導効果についての実践的研究をすすめていく必要がある。

## ● V. まとめ

特別支援学校の体育指導は、体育(保健体育)及びそれ以外の体育的活動、部活動、さらには教育課程外の活動等、教育活動全体を通して行われている。ところが、現段階ではそれぞれの取り組みに関連性がなく、より効果的な体育指導が行われるためにも、個人的運動種目と集団的運動種目の時間配分を検討することや指導内容等を相互に関連づけていくことが求められる。また、体育の授業としては体育理論や保健分野についての指導が十分に行われておらず、この点については他の教科でどのように取り扱われているかについて調査しておく必要がある。球技等の集団的運動種目は、卒業後の余暇利用や生涯スポーツへのつながりを意識し、指導内容を選定していくとともに、低年齢段階からの一貫して継続的な取り組みを行っていくことや、投動作の指導方法に関しての実践的研究を積み重ねていきたい。

## 文 献

- 1)橋本創一・渡邊貴裕・尾高邦生(2009)：知的障害児の投動作の発達過程とその援助に関する実践的研究。特集教育学研究,47(1),61.
- 2)文部省(2009)：特別支援学校幼稚部教育要領、小学部・中学部学習指導要領、高等部学習指導要領、平成 21 年 3 月告示。海文堂出版株式会社,191.
- 3)太田俊己(2010)：平成 21 年版特別支援学校新学習指導要領 ポイントと授業作り 特別支援教育[知的障害・発達障害]。東洋館出版社, 85.
- 4)渡邊貴裕(2010)：ダウン症児の保育・教育実践に関する到達と課題。発達障害学研究会スポーツ教育学研究, 32(4),63.
- 5)渡邊貴裕(2007)：特別支援学校における体育の教育課程に関する調査研究。発達生涯支援システム学研究, 6(2),45.

6)渡邊貴裕・原田純二・小島啓治・尾高邦夫・國分充(2008):特別支援学校における教科教育学的研究・学部間の連携による教育課程づくり. 東京学芸大学紀要総合教育学系,第 59 集,30.

7)渡邊貴裕・橋本創一・菅野敦・中村勝二(2010):知的障害児の投動作の指導に関する研究. 東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要,第 6 集,90.